

電子メールによる日本人大学生と中国人日本語学習者による

弔意・見舞いの示し方の相違

萩原明子（東京薬科大学） 中村純子（松本大学）

1. はじめに

インターネットの発達、モバイル端末の普及により、テキストメッセージや電子メール（以降メール）のようなデジタル化された書き言葉によるコミュニケーションが社会生活において重要な位置を占めるようになった。オンラインのコミュニケーションは、従来のコミュニケーションツールである手紙や電話と異なる感情の共有や共感を表す語用論的な配慮が表出されるのではないかと考えられる。社会的な場面における日本語の書き言葉は高度に慣習化され、文の構造や言葉遣いも定型化されており、電子メールにおける定型文を用いたやり取りの方法が大学の初年次教育に取り入れられるなど、社会化の一部として認知されている。一方、個人間でのやり取りには人間関係に基づく書き手の読み手に対する配慮も言語化される必要がある。とりわけ相手の身内に不幸があった時や怪我や病気になった時に書くメールには、相手との関係性や書く内容に応じて適切な配慮表現が使用されることが求められる。本研究では、擬似的メールを用いて、相手への配慮が特に要求される場面における日本語母語話者の学生と中国人日本語学習者のポライトネスの表し方の違いを8つのシナリオを用いて調査した。それらのうち本論は、学生から教員に向けて書かれたという想定二つのシナリオでのメールを定量的、定性的に分析したものを報告する。

2. 先行研究

経済や文化のグローバル化が進む現在、さまざまな文化の出身者による日本語を使用したコミュニケーションの機会が増えるに伴い、日本語の談話レベルの対照研究が増加してきている。その中でも人間関係に及ぼす影響が大きい依頼、断り、感謝、謝罪などの言語行為における対照研究が多くみられるようになってきた。話し言葉だけでなく、電子メールや携帯メールを対象とした研究も増加してきており、ポライトネス理論 (Brown and Levinson, 1987) に基づいたストラテジーの分析 (ハーティング, 2008)、ディスコース・ポライトネス理論 (宇佐見, 2008) を用いた対照研究 (王・聞, 2015)、更には、意味公式を用い談話の展開を構造的に分類する分析方法 (濱田ら, 2013; カムトーンティップ, 2015) など、異なる理論的背景、研究方法による知見が蓄積されつつある。

受け取ったメールに返信する形でデータ収集を行なった三宅 (2014) は、携帯メールを媒体として用い、日本語と英語での比較を試みた。三宅 (2020) は、ソーシャルメディアのLINEを用いた依頼談話を構造的に分類し、デジタルメディアによる談話の分析方法を提案している。横川 (2022) は日本語母語話者と非母語話者のビジネスパーソンを対象に、メールによる配慮行動を調査し非母語話者が感じる執筆時の困難を明らかにした。

沖 (2015) は社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の4層が同時に作用するというモデルを構築し、日本人と中国人の日本語による依頼メールの異なりを、中国語母語話者による負の母語干渉として説明した。メールによる依頼を分析した大友 (2009) は、日本人母語話者と中国人学習者が用いるストラテジーが異なることを「わきま

¹ 本稿は中村・萩原 (2021) の (シナリオ1) に新たなデータ (シナリオ2) を加え、再分析したものである。

え」と「フェイス」の両面から分析した。

このように電子メディアを利用した書き言葉の研究が増加しているが、対象となっている言語行為は、依頼、断りなど種類が限定的であり、談話レベルの対照研究で同情表現に焦点を当てたものはほとんどない。同情を示すことが期待される場面で同情表現を使用しない、或いは、同情の表し方が不適切だと第二言語話者であっても人間関係に影響をもたらすことが考えられる。本調査では、中国語話者の日本語によるメールを同年代の日本語母語話者のものと比較した。さらに中国語母語話者の中国語によるメールも語用論的転移の考察ため加えた。

3. 調査方法

本調査は疑似的なメールに対してメールで返答する形で行われた。教員から送られた約束をキャンセルする内容の疑似的メール2種類（キャンセルの理由（1）教員の母親の死亡、（2）教員自身の怪我）に、日本人学生、中国人学生に返信してもらった。

これらの疑似的メールは、筆者ら（Hagiwara・Nakamura, 2017）が2017年に行った調査から得たものである。2017年の調査では、3つの不幸な状況（身内の死、怪我、火事）と、その不幸がもたらされた対象との親疎、およびメールの対象との上下関係を考慮して18の状況を設定した。教員、学生にそれぞれの状況に応じたメールを書んでもらい分析を行った。その中の二つの状況への返信の中から典型的と思われるメールを今回の調査に使用した（シナリオの例の「受け取ったメール」参照）。

本調査のシナリオ例

（シナリオ1）あなたは佐藤薫（さとうかおる）という名前の大学生です。山田晴子（やまだはるこ）先生から、以下のメールが来ました。あなたが、佐藤さんだったら、どんな返信を書きますか。佐藤さんになって、山田晴子先生に返信を送ってください。先生のメールアドレスはxxxx@xxxx.ac.jpです。

（受け取ったメール）

件名:	面談日変更について
本文:	佐藤さん、 山田です。卒業論文の進み具合はどうでしょうか。 急なことなのですが、明日の面談を延期させてください。実は、今朝母が亡くなりまして都合がつかなくなったのです。 改めて面談日を決めます。近日中にはお知らせいたしますので、よろしくお願いします。

調査の参加者は、日本人学生（J）56人（日本語）、中国人学生（C）24名（日本語）、15名（中国語）で、実際にメールを書き、送信する形で行われた。返答として得られたメールの内容を開始部、同情部、命題部、収束部の4つに分け、同情部の全体に占める文字数の割合と使用された言語表現を比較した。文字数を比較の対象としたのは、言語表現の長さが丁寧さの指標（伊藤恵美子, 2006）になり得るという考え方を分析に応用するためである。

4. 結果

研究参加者から得られたメールの文字数の平均とメールの部分が含まれる比率をまとめたものが表1である。日本語で書かれたシナリオ毎の返答の長さを比較したところ、どちらのシナリオでも総文字数（単位=字）はCの方が多かったが（シナリオ（1）J（n=30）（M=76.8, SD=34.5）、C（n=12）（M=145.6, SD=42.6）；シナリオ（2）J（n=26）（M=81.5, SD=33.0）、C（n=12）（M=132.5, SD=38.0））、総文字数のうち同情部が占める比率（単位=%）は、シナリオ（1）ではC、シナリオ（2）ではJが大きかった（シナリオ（1）J（n=30）（M=18.23, SD=21.76）、C（n=12）（M=42.92, SD=27.43）；シナリオ（2）J（n=26）（M=27.88, SD=13.76）、C（n=12）（M=33.75, SD=25.79））。それぞれのシナリオにおけるJとCの文字数および全体の文字数における比率をそれぞれ検定（マン・ホイットニー-U検定）した結果（表2）、文字数に関してはシナリオ（1）で、Cが有意に多く、同情部の文字数が全体において占

める比率に関しては、シナリオ（2）でJが有意に高かった。

表1. メール各部分がメールに含まれる割合と各部分の文字数

参加者	開始部		同情部		命題部		収束部		文字数平均 全体
	メール数 (割合)	文字数平均	メール数 (割合)	文字数平均	メール数 (割合)	文字数平均	メール数 (割合)	文字数平均	
シナリオ（1） 教員の母の死									
J (30)	26 (86.7%)	14.3	20 (66.7%)	18.2	30 (100.0%)	39.4	7 (23.3%)	4.2	76.8
C (12)	12 (100.0%)	28.4	12 (100.0%)	42.9	12 (100.0%)	52.8	10 (83.3%)	18.1	145.6
中国語 (10)	10 (100.0%)	9.2	10 (100.0%)	36.4	10 (100.0%)	49.7	4 (40.0%)	7.3	137.5
シナリオ（2） 教員自身の怪我									
J (26)	24 (92.3%)	17.0	25 (96.2%)	27.9	25 (96.2%)	30.8	5 (19.2%)	2.6	81.5
C (12)	12 (100.0%)	23.0	11 (91.7%)	33.8	12 (100.0%)	62.8	9 (75.0%)	12.7	132.5
中国語 (5)	5 (100.0%)	15.4	3 (60.0%)	22.8	5 (100.0%)	73	1 (20.0%)	3.8	128.6

日本語で書かれたシナリオ毎の返答の長さを比較したところ、どちらのシナリオでも総文字数（単位=字）はCの方が多かったが（シナリオ（1）J（n=30）（M=76.8, SD=34.5）、C（n=12）（M=145.6, SD=42.6）；シナリオ（2）J（n=26）（M=81.5, SD=33.0）、C（n=12）（M=132.5, SD=38.0））、総文字数のうち同情部が占める比率（単位=%）は、シナリオ（1）ではC、シナリオ（2）ではJが大きかった（シナリオ（1）J（n=30）（M=18.23, SD=21.76）、C（n=12）（M=42.92, SD=27.43）；シナリオ（2）J（n=26）（M=27.88, SD=13.76）、C（n=12）（M=33.75, SD=25.79））。それぞれのシナリオにおけるJとCの文字数および全体の文字数における比率をそれぞれ検定（マン・ホイットニーU検定）した結果（表2）、文字数に関してはシナリオ（1）で、Cが有意に多く、同情部の文字数が全体において占める比率は、シナリオ（2）でJが有意に高かった。

表2. 同情部の文字数および文字数の全体における占有率の比較（マン・ホイットニーU検定）

		J	M(SD)	C	M(SD)	総計量 U	総計量 z	pvalue
文字数 (字)	シナリオ（1）	18.23	(21.76)	42.92	(27.43)	71.5	3.02	0.003 $p < .01$
	シナリオ（2）	27.88	(13.76)	33.75	(25.79)	143.5	0.39	0.697 ns
占有率 (%)	シナリオ（1）	20.05	(17.62)	28.58	(14.67)	128	1.45	0.147 ns
	シナリオ（2）	34.19	(13.05)	23.13	(13.33)	84.5	2.25	0.024 $p < .05$

メール本文に同情部を全く含まないものがシナリオ（1）のJに10、シナリオ（2）のJに2、Cに1あったため、Jのシナリオ（1）（2）における同情表現の含有率を検定（Fisher's exact test）したところシナリオ（1）における同情表現が（2）と比べ、有意に少なかった（両側検定, $p=.007, Phi=.38, h=.84$ ）。

表3は、収束部の結語のパターンを比較したものである。読み手に印象として残るメッセージの結語には、シナリオ別の特徴および学生間に違いが見られた。

表3. メール結語のパターン

		よろしく	今後の約束	気遣い	メール本題	弔意表現	その他
シナリオ1	C(12)	7	0	3	1	0	1
	J(30)	7	10	4	3	6	0
シナリオ2	C(12)	2	3	7	0	0	0
	J(26)	2	2	16	5	0	1

シナリオ（1）ではCは定型表現の「よろしく願います」に加えて、読み手の心身を気遣う言葉が多かったが、Jは定型表現に加え、弔意表現および読み手の負担を軽減させる表現、「連絡お待ちしております」など今後の約束に関わる表現を多用していた。シナリオ（2）では、双方とも相手の心身の健康を気遣う表現が多かった。

5. 考察

分析した2つのシナリオはどちらも同情に値する状況にある教員に対するものだが、怪我と身内の不幸では、文

面が大きく異なっており、さらに日本人学生 (J) と中国人日本語学習者 (C) では、内容も形式も異なっていた。メールの長さでは、C がどちらのシナリオでも長く、同情部ではストレートに同情の気持ちを表していた。一方、J はシナリオ (1) で同情部の比率が少なく、J が教員の身内の不幸に対して弔意を示すことを躊躇していることが窺えた。メールの中で、弔意を含む同情表現が全くみられなかったものが多かったのも、シナリオ (1) の J に特徴的だった。メールの結語では、J には弔意を示す定型表現を結語として用いていたものが見られたが、C は結語において使用した例がなかった。C は弔意表現を結語として使用できると認識していなかった可能性がある。

シナリオ (1) の C のメール内容を中国語で書かれた中国語母語話者のデータと比べてみたところ、弔意・同情をストレートに表す傾向が似ており、語用論的な転移が示唆される。J は、教員の身内という遠い関係にある他人の死について、定型表現を用いるか、或いは弔意・同情を表すことを避け、比較的短く要件のみを伝えていたが、C は、言葉を尽くし教員の心に寄り添うような意図が読み取れた。J のメールからは、教員の個人的な事情に立ち入りたくないという相手のネガティブフェイスに配慮した傾向が見られ、C は、同情を示すことで相手のポジティブフェイスに配慮していると考えられる。一方、怪我の場合は、教員の身体的状況に関して J も C も躊躇なく同情表現を使用しており、この場合は、ポジティブフェイスに配慮することが適切であると判断したためであろう。

以上のように今回、限られたサンプル数ではあったが、相手の個人的な事情に対する配慮表現が日中間、および状況間によって異なることが示された。

参考文献

- 伊藤恵美子 (2006). 日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか: 長さや適切性からの分析 異文化コミュニケーション研究, 18, 145-160.
- 宇佐見まゆみ (2008). ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論— 社会言語科学, 11 (1), 4-22.
- 王玉明・聞芸 (2015). 電子メールによる依頼行動に関する日中対照研究—ディスコース・ポライトネス理論の観点から— 東アジアへの視点, 26 (3), 53-59.
- 大友沙樹 (2009). 電子メールにおける依頼のストラテジー—日中対象の観点から— 国際文化研究, 15, 61-72.
- 沖裕子・趙華敏 (2015). 日中依頼談話の特徴と日本語教育 異文化理解と日本語教育 趙華敏 (編) 高等教育出版社 pp. 107-133.
- カムトーンティップ・タワット (2015). 日本語での約束をキャンセルするメールの談話構造 日本語・日本文化研究, 25, 54-65.
- 中村純子・萩原明子 (2021). 「同情を含む談話」の研究—日本人短大生と中国人日本語学習者のメールを比較して— 松本大学教育総合研究, 5, 63-81.
- Hagiwara, A. & Nakamura, J. (2017) Cancelling an Appointment in Japanese: How to mitigate the FTA of Cancellation *The 40th Annual Conference of the AAAL*, Portland, p. 167.
- 濱田美和・古本裕子・桑原陽子・深澤のぞみ (2013). 中国人留学生と日本人大学生の断りの E メールと比較 富山大学人間発達科学部紀要, 8 (1), 221-233.
- ハーディング, アクセル (2008). ドイツ語と日本語における E-メールの対照研究: 筆記による依頼のストラテジー— 広島外国語教育研究, 11, 121-131.
- Brown, P. & S. Levinson (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage* Cambridge U. Press.
- 三宅和子 (2014). 携帯メールにみられる配慮表現 野田尚史・高山善行・小林隆 (編) 日本語の配慮表現の多様性 くろしお出版 pp. 279-296.
- 三宅和子 (2020). LINE における「依頼」の談話的特徴を記述・分析する (2) —トークの単位分類をめぐるノート— 文学論藻, 94, 19-36.
- 横川未奈 (2022). 日本語によるビジネス E-メールの配慮言語行動を示す際にビジネスパーソンが抱える困難点— 選択意図・配慮表示の際の事例から— BJ ジャーナル, 5, 25-38.